

英国病理学会参加報告

大阪大学大学院医学系研究科 病態病理学
大島健司

この度、2019年度日本病理学会学術奨励賞受賞者として2021年7月6日～8日に開催された英国病理学会(Manchester Pathology 2021)に派遣して頂きましたので、学会参加について報告致します。今回は virtual meeting であり、オンラインで参加することとなりました。

学会では、“Gastrointestinal Pathology”のセッションで“Serine racemase promotes colorectal cancer growth and is a new therapeutic target for colorectal cancer”と題する口演を行う機会を頂きました。中枢神経系でのみ機能が明らかにされていたD-,L-セリンの代謝酵素であるSerine racemaseが、大腸がんにおいてL-セリンからピルビン酸を産生する代謝経路を介してがん細胞の増殖を促進すること、そして治療標的になり得ることを示した研究です。

virtual meetingであったため、当日は座長による各発表者の紹介の後に事前に録画、送付していた口演動画が流され、全ての発表者の口演の後にライブ配信でQ&Aを行うという形でセッションが行われました。発表に際しては、座長であるManchester大学のProf. Raymond McMahonとLeeds大学のProf. Phil Quirkeにサポートして頂きました。また、発表の前日にはTrainee Subcommitteeの先生方が、30分程のwelcome meetingを開いて下さりました。温かな雰囲気でご案内いただき、翌日のセッションへの緊張が和らぎました。

参加したセッションや聴講した他のセッションにおいても、様々な国の参加者が発表しているのが印象的でした。現地開催で得られるような交流は出来なかったものの、このような国際的な学会で発表させて頂いたことは大変貴重な経験であり、今後の研究において非常に刺激を受けました。このような貴重な機会を与えて下さりました日本病理学会および英国病理学会の関係者の皆様方に、心から感謝申し上げます。

また、学会が開催される予定であったManchesterを今回は訪れることは出来ませんでした。welcome meetingでTrainee Subcommitteeの先生方もManchesterはとても綺麗な街だと仰っていました。来年から英国にあるThe Institute of Cancer Research, Londonの腫瘍代謝研究室で日本学術振興会の海外特別研究員として研究する機会を得られましたので、また生活が落ち着いたらManchesterを訪れてみたいと思います。最後になりますが、病理学の中でもこれまで研究してきた腫瘍代謝学を一步ずつ究めていこうと思いますので、今後とも御指導、御鞭撻のほど何卒よろしくお願い申し上げます。